

国内事情の再考③ ―可塑性についての破―

一般社団法人 光楓座 代表理事 佐藤建吉

はじめに

可塑性についての続編を記したい。可塑性とは、「現状からの改革を実現するためには、行為や所作のトレースバックではなく、次の進歩や飛躍のための履歴づくり」とも言い換えることができる。それは「新たなエフエクト」と「求めるリザルト」をもたらす。前回のコラムでは、ばねの伸びでそれを図解した。

近年、政府が唱えるリスキングに関連して述べれば、「新年を迎える個人が、昨年の自分とは違い、年頭に、前年から成果として進歩した自分になったければ、リス

をとりえ、エコエティカ

三菱商事ほかによる「秋田県沖及び千葉県沖における洋上風力発電事業における国内・地域サプライチェーン構築と地域の活性化に繋がる共生策について」

1.コンソーシアムのお約束：

①国内・地域サプライチェーンの構築

洋上風力発電事業の開発・建設・運営に当たり、新たな産業・雇用を創出するため、地元自治体・経済団体と協調し、元請企業と連携した上で、地元企業・地元港湾・地元金融機関等の最大活用を目指します。

②地域の活性化に繋がる共生策の実施

洋上風力発電事業と最も近い距離にある関係漁業者に対する「持続可能な漁業支援体制」の構築、漁業以外の産業領域に対する「地域産業の振興と雇用の創出」、産業領域以外に対する「住民生活の支援」の3本柱により、立地地域全体への貢献を目指します。

2.具体的な取組み

①国内・地域サプライチェーンの構築：

- 開発・建設・運営の事業期間全体で国内・地域サプライチェーンを構築し、国産比率の向上を目指します。
- マッチングイベントや人材育成プログラムを継続的にを行い、地元企業との連携を目指します。

https://www.mitsubishicorp.com/jp/ja/news/release/2022/files/0000048758_file1.pdf

（生圏倫理学）、そして技術連関という観点も考えたい。

理念なき企業判断

当該の洋上風力の出来

事は、筆者の居住地の千葉県での洋上風力開発が、最近の物価の高騰により建設コストやサプライチェーンコストが当初の2倍に上昇したという

ことで、国家プロジェクトである洋上風力事業からの撤退を企業判断したというものである。それは、具体的には三菱商事の、その撤退発表を受け、今日の社会（日本の現代社会）は、これを受け入れた。入札という商取引で行われた、正式な、しかも秋田県と千葉

勝利（ビッグ・リザルト）と称され、その後の政治疑惑も誘発した。が、国家や自治体は、そして社会は、今回、撤退発表をなかば素直に受け入れた。

スポーツでの勝負、大勝負

見方を変えて、サッカーとプロ野球の監督の着

衣の違いについて述べてブレイクとしたい。サッカーの監督は背広を着て指揮をする。野球の監督はプロ野球でも、高校野球でも選手と同じようにユニフォームを着ている。野球の監督は、一球一球にその場で指示を与えることから、一体感が大事なのだろう。これに

対して、サッカーの選手は、自己判断でボール蹴り追いかけてプレイする。つまり選手の力量に任される。

いずれのスポーツであっても、日々のトレーニングが重要で、実践を目指すで行われる。背景にはスポーツ科学や心理学が導入される。水泳競技ではストロークやブレスなどの泳法について、はたまた摩擦抵抗の低い水着素材について、陸上の100m走やマラソンでもシューズの素材について研究開発されている。ここでも「科学技術」が貢献している。

大相撲では、力士が土

もあつての勝負、そして大勝利であつたはずである（関連後述）。

ビジネスにおける勝負

ビジネスの世界でも、相手の存在する現場で、商品やサービスの質や量、客先や世間の評価により業績が問われる。中小事業では、まさに一対一だったりで、評価や業績は分かりやすい。同時にその責任の所在も、また分かりやすい。しかし巨大事業となると、事業が広範囲で、複数の関係者、いわゆるステークホルダーが関わり、透明性が薄くなり、責任の所在があいまいになる。明快で明確なのが、外部評価である株価であり、経営もそれに左右されることになる。

三菱商事は世界を現場として培ってきた。同社は2021年の12月においては、高名な自信と期待に溢れた次のメッセージを掲げていた。

当社は、再生可能エネルギーの導入が先行して進む欧州市場において、過去10年に亘り合計7案件、350万kwの洋上風力発電事業に参画し、積極的に人材を送り込み開発から運営まで主体的に関わることで、同分野における経験・知見の蓄積・内製化と、「洋上人材」の育成を進めて参りました。また、本件では2020年に子会社化したオランダの総合エネルギー事業会社Enecoの人材も応札準備段階から参加しており、同社が蓄えてきた豊富な洋上風力発電事業の知見も最大限活用する計画です。また、国の調査データに加え、独自の調査や既存文献の精査を経て、海域ごとに異なる海象条件・気象条件など、あらゆるリスク項目の抽出・分析を通じて事業リスク・不確実性に対する最適化を図り、長期に亘る事業の健全性を確保しつつ、本件に取り組みものです。

現代社会である。

実は、洋上風力事業への応札は、すでに海外での実績もあり、日本の未来を牽引すべくとの意志

なる。明快で明確なのが、外部評価である株価であり、経営もそれに左右されることになる。

現代社会はグローバル化、巨大化し、科学技術の適用なしには身動きできない時代となっている。しかも即時対応が求められる。その判断には、集団や組織の利益ファーストに考える風潮が顕在化し、その行く末については頭が回らない。科学技術が空気と同様なくはならない環境であり、「技術連関」と呼ばれる社会となっている。AIの登場も新しい技術連関であり、その主導は大企業や国家の手中に専有される。そして、責任はあいまいになる。そのことを指摘しているのが、集団の倫理学、「エコエティカ」である。それは、実は人間が持続可能で未来を生きるための生圏倫理学である。エネルギーの問題、食料の問題、人権の問題、課題は山積している。じつは、課題は、「チャレンジ」と呼ばれる。投げ出すのではなく、解決に向けた取り組みと、その因果の解決に努力すべきである。心技体の訓練は、状況の即時判断への有効な裁量を与える。集団化したビジネスの裁量には、「エコエティカ」が唱える集団の倫理学が必要である。次回、「説明責任」と可塑性について述べたい（続く）。